

# 京都府青少年育成協会会長奨励賞

## 「あの日のポピーを眺めて」

京都文教中学校 1年

有田 芽以

着いたよ、という言葉に車を降りる。駐車場のすみ、健気にポピーが一輪ゆれていた。その光景をどこかで見たことがある気がして、私は記憶の糸を必死にたぐりよせる。すると、ずっと忘れていたあの記憶が少しずつ蘇ってきた。

私は小学二年生で、通学途中、畑を眺めるのが好きだった。その時特にお気に入りだったのは、畑のすみにたった一輪で咲いていたポピー。毎日ちょっとずつ様子が変わって見えた。晴れた日はわくわくした感じ、雨の日は少ししょんぼりした感じ。もしかしたら、それはポピーの様子ではなく私の気持ちを表していたのかもしれないけれど、とにかく私はそのポピーを眺めるのが好きだった。

しかし、ある時からその畑に重機が入るようになった。何か建物が建つのだという。私はとてもショックだった。ポピーさんはどうなっちゃうんだろう、と心配だった。

そこで私は友達と一緒に作業員の方に声をかけて、ポピーさんを何とかして下さい、とお願いすることにした。作業員の方はにこにこ笑って、ポピーを土ごとバケツに植えかえ、作業をしていない方に移動して下さい。

私は思い出して、我ながら、よく勇気を出せたなあと思った。今だったら作業員の方に声をかけることなど、到底できそうもない。いやその前に、そもそも畑のすみのポピーに気付くことすらできないのではないか。あの頃と今で、私は変わった。そのことは確かだけど、その変化を「成長」といいいいのか、私は分からなくなってしまった。

「成長」って何なのだろう、「大人」って、「子ども」って何なのだろう、などとぐるぐる考える。数字の上では十八歳からが大人で、それに近づいていくのが成長なのだろうけど、それだけではない何かがある気がした。

そして、見つけた。大人とは、当たり前のことを当たり前でできる人のことなのだ。挨拶、礼儀正しく振る舞うこと、常識を考えることなど。それら当たり前だと言われることが普通に行え、そしてそのことを当然だと思っている。だからより高度なことができるのだ。当たり前のことのできていなくては、高度なことはできない。

それに対して子どもは、生活が疑問と驚きに満ちあふれている。大人が当たり前だと思うことの一つ一つに疑問や驚きを感じるため高度なことはできないが、その分大人が気が付かないような根本的な部分で新たな発見をすることができるのだ。

このことに当てはめて考えると、あの頃と今の私の変化は、やはり「成長」といえる気がする。私は当たり前のことを当たり前で思えるようになったのだ。地域の畑がどんどん少なくなっていくこと、建物を建てる時は畑の花を抜いて捨ててしまうこと。当たり前、というより仕方ない、の方が近いかもしれないけれど、そういった出来事に感情を大きくゆすぶられることが少なくなっていくのが成長なのかな、と思った。

大人と子どもは、視点が違うのだ。それらの視点はどちらも優れていて、どちらも劣っている。どちらかが良くて、どちらかが悪い、なんて決められるものではないのだ。双方が足りないところを補い合うからこそ、より良いものが生まれるのだと、私は思う。

これからどんどん、私の視点は変わっていく。見えなくなるものがあり、見えるようになるものがある。見えるものが変わっていくにつれて、子どもの視点から見ていた世界がどんなだったか、忘れてしまうこともあるかもしれない。そして、自分も小さい頃は子どもの視点から見ていたことすら、忘れてしまうこともあるだろう。しかし、そんな時にはふとした瞬間に子どもの頃の思い出が鮮やかに蘇るはずだ。その思い出をずっと大切にしていれば、あの作業員の方のように、子どもの視点も大切にしたい行動ができるだろうか。

ポピーが一輪咲いていたあの畑は、今では農業協同組合になっている。そこを通るたびに私は、心の中で誓うのだ。大人の視点も子どもの視点も大切にしよう。あの作業員の方のような大人になれるように努力しよう、と。

私は今、小学校の先生になりたいと思っている。あのポピーは私に、どんな大人になりたいかという目標に気付かせてくれた。私は心の中のポピーを枯らさないようにしながら児童一人一人に寄り添えるような先生になるという目標を持って、変わりゆく自分の視点を楽しんで毎日を過ごそう、と心に決めた。